

報告

## 基礎看護技術習得に向けた自己学習への取り組みの実態

野村晴香 平瀬節子 坂本雅代 高橋永子 岡田久子

(高知大学教育研究部医療学系医学部門)

Evaluation of student's effort to learn a simulation training course  
for basic nursing skills.

Haruka Nomura Setsuko Hirase Masayo Sakamoto Eiko Takahashi Hisako Okada  
(Kochi University Research and Education Faculty Medicine Unit, Medical Sciences Cluster)

### 要 旨

本研究の目的は、看護技術習得に向けた自己学習の取り組みの実態を明らかにし、自己学習への学習支援を検討することである。結果は、講義前に必要な知識を整理し、講義後は知識と技術を結びつけ基礎看護技術習得へと取り組む学生が多かった。しかし、中には講義時のみで学習を終える学生も存在することから、自己学習への動機づけとなる指導が今後の課題となる。

キーワード：基礎看護技術、自己学習、看護学生

### Abstract

The purpose of this study was to evaluate student's effort of learning in the simulation training course for basic nursing skills, and to examine how learning assistance of student's effort should be performed. As a result, many students try to review knowledge required before lecture, and also try to review basic nursing practical techniques after lecture in order to connect knowledge with practical techniques. However, it was also found that some students learn only during the lecture time. Therefore, as a future issue in this matter, it should be noted that it is also important to undertake an instructive advise for the motivation toward student's self-learning.

**Keywords:** basic nursing skills, self-learning, nursing students

### 【緒 言】

医療技術は社会状況や技術の進歩につれて高度化複雑化となり、その変化に看護職が対応するには、日頃からの自己研鑽が重要な鍵となる。そこで看護基礎教育に携わる教員に

とって、学生自らが学習する力をどのように培っていくかが課せられた責務と考える。

基礎看護技術の科目は、看護とは何かをもとにどのように方法論として結びつけるか、実体験を通して看護を自覚するとともに、看護の必要性を判断し看護方法を実践していく

受付日：2009年7月31日 受理日：2009年9月24日

看護実践力の基盤の形成に繋がる重要な専門科目の1つである。また、基礎看護技術の習得には、看護技術の原理を理解し知る段階、繰り返し学習し身体への定着を図り身につける段階、対象の状況を見抜き応用し使う段階の3段階があり<sup>1)</sup>、段階的に自己学習を重ねることが不可欠な科目でもある。

本講座での基礎看護技術の授業展開は、演習の1週間前に、その技術習得に必要な知識である目的や根拠、必要物品、方法などを、学生が事前学習するように資料の提示、ビデオ視聴や事前デモンストレーションの実施による自己練習への促しを行っている。授業当日は、知識や技術のポイントを資料と突合せながらおさえた後、各ベッドに分かれて演習をする。その間の指導は、学生の実践を見ながら、根拠に基づいた方法か、患者への負担の程度など、技術状況を確認しつつ課題を明らかにし次の練習につなげている。技術の習得状況の評価は、中間期の技術チェックと最終の技術試験を、複数技術を取り入れた課題形式で実施している。しかし、これらの授業への取り組みが、学生にとって主体的な学習へと結びついているのか、その実態についての把握は不十分な状況である。

そこで、本研究の目的は、看護技術習得に向けた自己学習の取り組みの実態を明らかにするとともに、学生の自己学習能力を高めるための教育方法への示唆を得、効果的な学習支援を検討することである。

#### 【用語の定義】

自己学習とは、基礎看護技術の原理や方法などの理解や、方法を繰り返し学習し身体に身につけるために、学生自身が授業時間外に行う学習行動とする。

#### 【研究方法】

- 1) 研究対象 A大学看護学生1年生57名・2年生64名で生活援助技術論を受講した学生121名である。なお、1年生は、カリキュラム改正による移行期で2年生と同時期に受講した学生である。
- 2) 調査内容 (1)対象者の属性：学年(2)演習前後における学習の取り組みの実態：演習技術項目は、6項目(前期：ベッドメイキング・清拭・陰部洗浄、後期：経管栄養・導尿・輸液準備)であり、学習の取り組みの内容は、①内容の整理 ②資料調べ ③技術練習への取り組みである。
- 3) アンケート用紙の配布方法および回収方法 配布は授業終了後、対象者全員に説明した後で用紙を配布し、回収は無記名で個人封印後、設置した回収ボックスに対象者の意思で配布後14日までに投函してもらった。
- 4) 調査期間 2008年12月1日～12月14日
- 5) 分析方法 技術項目別に記述統計量をSPSS 15.0J for Windowsを使用し求めた。

#### 【倫理的配慮】

研究の参加は自由意思であり、参加を拒否しても学業成績など何らかの不利益を被らないこと、データ収集は、無記名で封筒に入れ封印後、回収箱に入れるなど個人が特定できないように配慮することなど、口頭と文書をもとに説明を行った。倫理委員会の審査を受け、承認を得て実施した。

#### 【結 果】

対象者1年生57名中25名、2年生64名中46名の回答が得られ、回収率は58.7%(71名)であった。

1) 内容整理への取り組み状況

内容整理の取り組み状況について、講義前6技術項目の平均(以下、前平均とする)は、「全体的にした」と「部分的にした」を合わせて90%(63名)、「しなかった」10%(7名)であった。講義後6技術項目の平均(以下、後平均とする)は、「全体的にした」と「部分的にした」を合わせて86%(60名)、「しなかった」14%(10名)であった。内容整理をした割合が最も高かった項目は導尿の講義前92%(65名)で、最も低かった項目は輸液準備講義後81%(57名)であった(図1)。

内容整理の種類について、前平均は、「手順のみ」36名、「目的・根拠・手順」16名、「目的と手順」2名であり、後平均は、「手順のみ」29名、「目的・根拠・手順」15名、「目的と手順」6名であった(図2)。

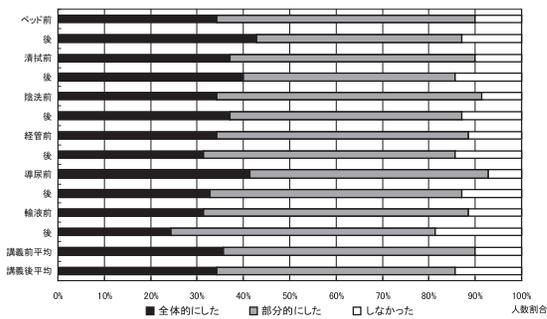


図1. 講義前後別における内容整理への取り組み状況の割合(n=70)

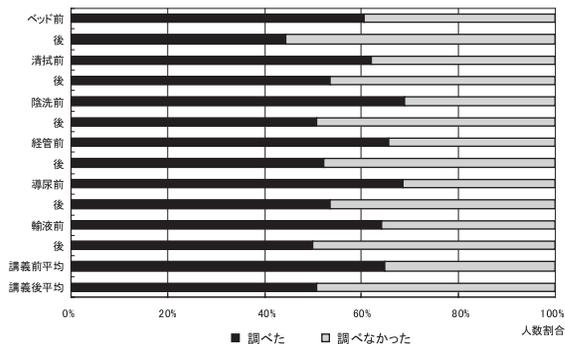


図3. 講義前後別における資料調べへの取り組み状況の割合(n=71)

2) 資料調べの取り組み状況

資料調べの取り組み状況について、前平均は、「調べた」65%(46名)、「調べなかった」35%(25名)であり、後平均は、「調べた」51%(36名)、「調べなかった」49%(35名)であった。資料調べをした割合が最も高かった項目は、陰部洗浄講義前69%(49名)で、最も低かった項目は、ベッド講義後44%(31名)であった(図3)。

資料調べの種類について、前平均は、「教科書のみ」26名、「教科書と図書館」9名、「教科書と参考書」6名であり、後平均は、「教科書のみ」21名、「教科書と図書館」3名、「教科書と参考書」5名であった(図4)。

3) 技術練習の取り組み状況

技術練習の取り組み状況について、前平均は、「一連の過程をした」と「部分的にした」を合わせて49%(34名)であり、「し

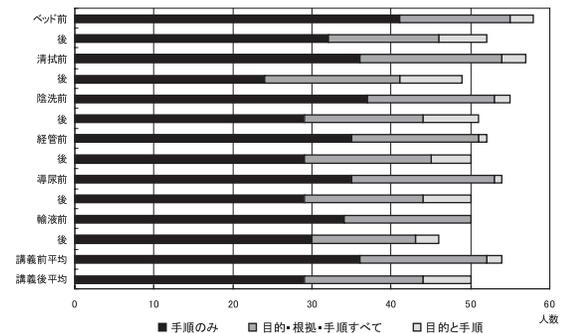


図2. 講義前後における内容整理の種類(上位3項目)

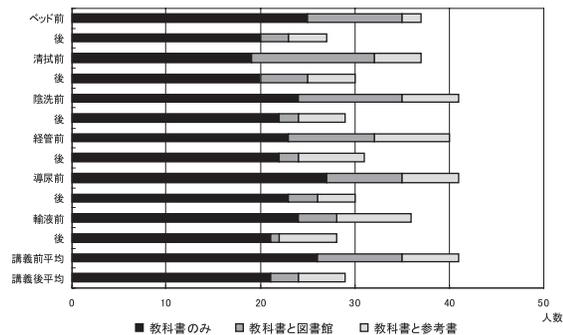


図4. 講義前後における資料調べの種類(上位3項目)

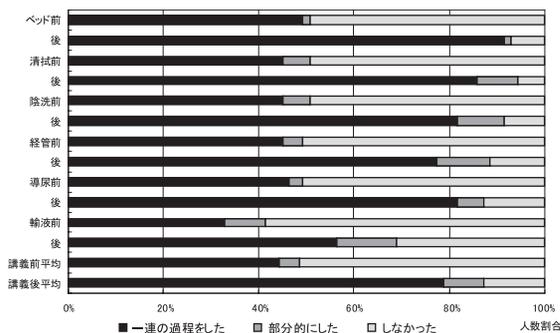


図5. 講義前後における技術練習への取り組み状況の割合(n=71)

なかった」51% (36名)であった。後平均は、「一連の過程をした」と「部分的にした」を合わせて87% (62名)であり、「しなかった」13% (9名)であった。技術練習をした割合が最も高かった項目は、清拭講義後94% (67名)で、最も低かった項目は、輸液準備講義前42% (29名)であった(図5)。

練習の取り組み内容について、前平均は「流れのみ」11名、「流れと部分」6名、「流れと部分と根拠」4名で、後平均は「流れのみ」22名、「流れと部分」11名、「流れと部分と根拠」11名であった(図6)。

【考 察】

内容整理や資料調べが講義前に取り組む割合が高いことは、授業方法として、講義一週間前に資料の配布や課題提示などを行っており、演習で実施する援助技術の目的や方法を理解し、技術の行動化に向けてイメージしておくなど学生は講義前に自己学習を行う意識が高められているものと考えられる。また、内容整理では、手順のまとめが自己学習の中心となっている。看護技術では、当面行う看護の開始から終了までの一連の動作をまとめとし、それを看護の道具とする<sup>2)</sup>という特徴があることから、教員は学習課題として一連の援助方法をまとめるよう提示することが多いことが反映していると言える。

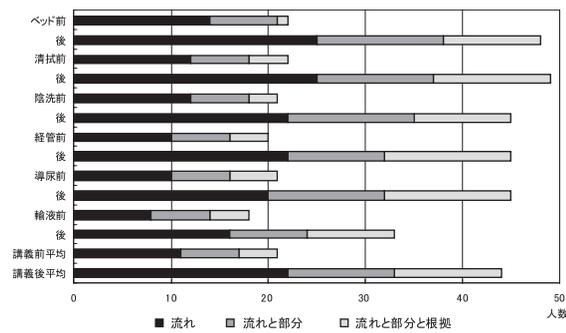


図6. 講義前後における練習の取り組み内容(上位3項目)

技術練習は、講義後の取り組みが明らかに多くなっていった。これは、講義を通して技術の原理や方法のポイントを理解した後、技術を身につけるための自己学習の姿であると考えられる。ただ、項目により取り組みに差が見られたのは、技術チェックや試験の有無が影響を及ぼしていると考えられる。また、取り組みの内容は一連の過程や流れを中心としながらも、講義後には、流れと部分と根拠を内容として行う割合が増えている。これは、学生が看護技術の原理と方法を結びつけることの必要性を理解し練習に取り組んでいると考えられ、学習姿勢の変化につながっているのではないかと考えられる。

学生の自己学習の取り組みは、大部分の学生が定着しつつあると考えられる。その一方で講義のみで学習を終える学生が存在している。知識や技術が定着し発展するためには、繰り返し学習する必要がある。学生自身が、課題に興味を持ち、知識・技術の習得のために「繰り返し学習し定着、発展させる」という学習の必要性が理解できるような取り組みが求められる。自己学習は学習活動と学習効果である学習成果や満足感に影響される<sup>3)</sup>ことから、看護技術を習得する過程で達成感や自己効力感を主観的に体験でき、学生の自己学習活動が学習効果としてつながるような指導が必要である。

## 【結 論】

- 1．内容整理をした割合は講義前が講義後に比べ高く、内容整理の種類は、手順を整理した学生が最も多かった。
- 2．資料調べをした割合は、講義前が講義後に比べて高く、資料調べの種類は、ほとんどが教科書を使用し、必要に応じて図書や参考書などを利用していた。
- 3．技術練習をした割合は講義後が講義前に比べて高く、練習の取り組み内容は流れを主眼にした練習をしていた。
- 4．基礎看護技術習得に向けた自己学習の取り組みの実態は、講義前に必要な知識を整

理し、講義後は知識と技術を結びつけ基礎看護技術習得へと取り組む学生が多かった。

## 【引用参考文献】

- 1) 薄井坦子・小玉香津子・三瓶眞貴子：系統看護学講座基礎看護学 2 基礎看護技術．第13版第3刷．14．医学書院．2003．
- 2) 田島桂子：看護実践能力育成に向けた教育の基礎．第2版第1刷．49-52．医学書院．2004．
- 3) 杉森みど里・舟島なをみ：看護教育学．第4版第1刷．209．医学書院．2004．